

明治の郷土画家



明治から大正にかけて活躍した郷土画家に花田龍溪がいる。本名、花田利平、天保十二年（二八四二）十月十七日、父花田与三郎の長男として大原村（現猿橋町）に生まれ、大正九年（一九一〇）八月十三日、七九歳にて、本籍地で逝去。

猿橋町心月寺（臨済宗建長寺派）に花田利平の墓碑があるが、大月市教育委員会発行の「大月の石造物Ⅱ」によると、花田利平についてつぎのように紹介している。

道・茶道・漢詩の分野でも活躍し、芸域の広い文人であった。

親交者に書家の野村素軒・佐倉達山・国学者の志村天目などがあげられる。

明治期における日本の画壇は南宗全盛時代であり、花田利平もこの影響をうけた画家である。直接の師匠は、はっきりしないが猿橋に長く寄寓した山本龍洞ではないかといわれている。明治二十二年に創設された東京美術学校（東京芸大の前身）にも第一期生として籍をおき絵画の勉強をしたようである。

また、文展等にも出品し入選すると、天覧を賜ったことがよほど嬉しかったのか「賜天覧」の印が、今でも数顆残されている。

一方、明治三十年から明治三十二年までの一期二年間、おされて大原村（現猿橋町）村長（第六代）を勤めたほか、猿橋心月寺の大檀徒と

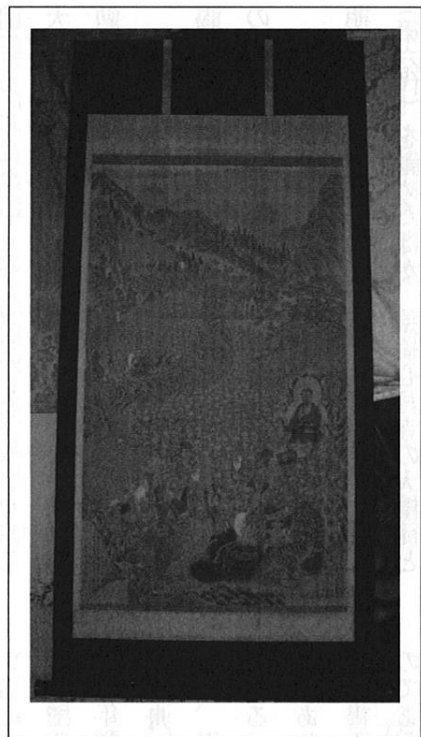
花田龍溪（花田利平）天保十二年～大正九年。天保十二年、猿橋町猿橋に生まれた。染布業を営む叔父の家業を継ぎ、東京工業学校で西洋の染色法を学ぶ。天才的な素質にあわせ、当時猿橋に住んでいた画家山本龍洞の教えを受ける。得意とする分野は山水・花鳥・佛画等で文展にも入選している。

藤崎妙楽寺『十六羅漢画像』（十六幅）・『農具三種』『鐘馗』・『七賢人図』等、市内外に作品が残されている。また篆刻・書・彫刻・華

して、当山への方広寺半僧坊勧請の大功労者であるなど、地域発展のため大いに力を尽した。

明治三十七年隠居し家督を子・規矩郎に譲り、専ら絵筆を取り、晩年河口湖畔の妙法寺に寄寓し、昼間は絵を描き夜は当地の人々にお花やお茶の指導をしたとのことであり、そのことから当地に多くの作品が残っている。

また、花田利平の文人との交流は多彩で幅広いものがあつたようである。「龍溪翁之碑」の撰文者である佐倉達山は「霞城の太刀風（二本松老少年隊の勇戦）」執筆者であり、著者に（徳川の三舟）がある。野村素軒は周防（現山口県）の人、勤皇の志士で明治の二筆の人ともいわれている。志村天目は甲斐の人で神道系統の国学者であり書家でもある。花田利平が収集したという書画幅三百本余り中に天目の作品があつたのであろう。



現在、大月市在住で、書家として活躍しているのが、花田智氏（雅号 龍溪）である。山梨書道協会会長、大月市書道会会長を歴任し、平成十一年には新宿センタービルで、花田龍溪書展を開催し、百六十余の作品を出品するなどして書道界の注目を集めている。

現存する花田利平の作品のなかで、猿橋心月寺にある「松梅唐人の図」は最晩年のものであり、「猿橋の図」とともに力作である。「五百羅漢の図」の製作は、永い月日をかけて描きあげたもので、五百個の餅切れを置きながら数を間違えないようにしたという逸話が残っている。さらに「くつを手にした達磨の図」はおもしろいといわれている。

翁とその雅号について「子供の頃、二階の客間の天袋の中から印材を持ち出してはろう石がわりに遊んだ記憶があり、その印材に刻まれていた『龍溪』を、私は勝手に踏襲して雅号として使用している。また、私が書の道に進むことになったのも、曾祖父利平の収集した多くの書画に囲まれて育った家庭環境によるところが大きい」と述べている。

参考資料 大月市の石造物Ⅱ（大月市教育委員会）

花田龍溪書展作品集

資料提供 猿橋心月寺

花田 智

花田 八重子

執筆者 山口 英昭